

琉球新報

2008年(平成20年)

11月10日 月曜日

穂 落ち

最近タルクは「あの太鼓の...」と言われることが増えてきた。とても喜ばしいというか「あの薬中の...」と言われるより、断然うれしいのです。今では、かつて沖縄タルクに繋がって通過していった仲間達が日本の各地で太鼓の練習に、出陣に汗しているのです。

沖縄タルクが太鼓を始めるとき、きっかけとなったのは、タルク創設者の近藤(なん)と第三十五回吉川英治文化賞を受賞した、私の命の恩人。難しいことは出来ないけれど彼の真似なら意外に簡単にできるのではと勘違いさせて頂いたので私のクリーン(断薬期間)がスタートしたのです。沖縄タルクを創ろうとして、視

※「落穂」とは、琉球新報紙の文化面のコラムで、今回は10回目の掲載分です。10名の執筆陣の中に施設長の三浦も含まれ半年間、計13回ほどの掲載が予定されています。紙面でご覧頂けない方にも読んで頂きたくニューズレターにて転載していきたく思いますので、どうぞお付き合い下さい。

嗚呼 太鼓

三浦 陽二

(沖縄タルク・チーフディレクター)

祭と準備の為に泊まった「沖縄サンコーストホテル」が琉球國祭り太鼓の会長、昭屋辰弘氏の経営だったのです。「たくさんの友人ができませんよ」のお言葉に、人と同じ

「...」と書かれたのは、当時の太鼓のプログラムが嫌で逃げ出してしまおうという気持ちで書いたのです。太鼓が好きで本格的に始めるために逃げ出した人まで出ました。

その後、二〇〇五年NARワールドコンベンション・イン・ハワイに、日本各地に散った沖縄タルク出身者、約三十人が世界中の良き回復中の薬物依存症者三万五千人の前で、の検舞台を踏むことが果せました。世界中の仲間のそして私達の説明しようのない涙は今でも忘れられません。そして国内の薬物依存症業界の大きなイベントではお約束のように披露される様になったのです。

察と準備の為に泊まった「沖縄サンコーストホテル」が琉球國祭り太鼓の会長、昭屋辰弘氏の経営だったのです。「たくさんの友人ができませんよ」のお言葉に、人と同じ

「...」と書かれたのは、当時の太鼓のプログラムが嫌で逃げ出してしまおうという気持ちで書いたのです。太鼓が好きで本格的に始めるために逃げ出した人まで出ました。

その後、二〇〇五年NARワールドコンベンション・イン・ハワイに、日本各地に散った沖縄タルク出身者、約三十人が世界中の良き回復中の薬物依存症者三万五千人の前で、の検舞台を踏むことが果せました。世界中の仲間のそして私達の説明しようのない涙は今でも忘れられません。そして国内の薬物依存症業界の大きなイベントではお約束のように披露される様になったのです。